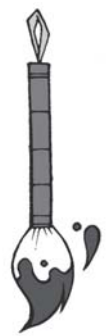


日本古代の馬と駅家うまや



下野市教育委員会 文化財課

下野市甲塚古墳から出土した馬形埴輪は、足が長くスタイルがよく駿馬の様相を示しています。古墳時代の中頃、朝鮮半島から馬を育てる技術が日本(倭)に伝わり、東国がその飼育に適していたからか古代から中世を通じて名馬が多く生まれました。平安時代(10世紀)の法令集である『延喜式』の「諸国馬牛牧」に「朱門牧」と記載されており、現在の栃木市藤岡地区周辺に公的施設として牧が設置されていたことがわかります。また、下野国の駅馬(駅家)として、「足利・三嶋・田部・衣川・新田・磐上・黒川」の施設に各10疋、「安蘇・都賀・芳賀・塩屋・那須郡」に各5疋が配置されていたことが記されています。下野国府の一つ手前の駅家が三嶋(三嶋)で旧岩舟町豊岡遺跡がそれではないかと考えられています。また、田部の駅家は国府から東北に向けて出発した際、最初の駅家となりますが、距離的には上三川町付近、以前は多功南原遺跡がこの田部駅家ではないかと考えられていました。

往來をする人々に宿所と食糧、乗り換え用の馬や餌を提供する施設として設置されました。「駅使」は原則として1日に10駅以上、通常は8駅以上進まなければなりません。駅使に支給される日当・報酬は少なく、1日当たり稲3〜4把と酒8合〜1升、従者には稲3把となっていました。この公務連絡以外に公私の目的を問わず、位階・勲位を持つ者の旅行の宿泊利用は例外的に許されていました。有名なものは、天平10年(738)に平城京(奈良)から従四位下小野朝臣牛養が療養のため、従者12人を連れて那須の温泉に行く途中、静岡県で78人分の食料の支給を受けています。従四位ですから堂々と私的流用の請求が行われ、認められたわけです。

古代の五畿七道と呼ばれる行政単位とともに敷設された各官道は大・中・小に区分され、下野国を通過する東山道は中路であったため、馬10疋が置かれました。また、各郡(郡衙)郡役所と下野国府(栃木市)の連絡用に各郡に5疋が置かれました。現代に例えるといわゆる公用車です。『延喜式』には各国に402の駅(駅家)が置かれたと記されています。駅家は兵部省の管轄下にあり実際の運営には国司が関与していました。これは想像ですが、奈良時代有事の際、天皇からの命を受けた飛駅(最も速い駅使)は、駅鈴を振りながら平城京の朱雀門を通過し、大宰府や多賀城まで馬を飛ばしたと思われます。彼らは大宰府まで4〜5日、多賀城までも7〜8日で行けたと考えられています。

また、『延喜式』の左右馬寮の記載には、毎年各国から馬や牛を中央に収めていた記録があり、東国では、駿河国牛4頭、相模国馬4疋、牛8頭、武蔵国、上総、常陸国馬10疋、上野国馬55疋、牛6頭、下野国馬4疋と記されています。馬のほか、川を渡る際の船を管理した「駅船」の記載もあり、古代の交通ネットワークが発達していたことを物語っています。

菅原道真が「駅長莫驚時変改一榮一落是春秋(駅長驚くことは無い、時の移り変わりは一榮一落、これ春秋)」という漢詩を詠んだのも藤原時平の陰謀によって失脚し、大宰府に左遷となった際に途中立ち寄った駅家の駅長の情けに対する返礼といわれています。

※古代の1里は、1里=533.5mで1里=5町=30歩でしたが、江戸時代の1里は、1里=約3.9kmで、1里=36丁と異なります。